



子どもたちはリナム中学校を訪れ、日本のリサイクル活動について発表した。環境クラブのメンバーからの質問に答える茅野実苗さん(右)



JICAの開発教育支援

このコーナーでは、各地の教育委員会や学校、NGOなどによる開発教育・国際理解教育の実践・普及を支援するJICAのさまざまな取り組みを紹介します。

## 第14回

# 環境問題と闘う人々に出会って

2006年度の「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」で最優秀賞を受賞し、マレーシア研修旅行に旅立った5人の中学生。後編は、環境教育に取り組む青年海外協力隊員の活動現場や、リサイクル活動などに力を入れる中学校を訪問した様子を報告する。先住民の暮らしを体験するホームステイの様相を紹介した前編は5月号を参照。

JICAホームページ <http://www.jica.go.jp/ieapark/monthly/index.html>でも閲覧可能。



飯塚さん(右から2人目)の活動先の一つである廃棄物処理場を視察。飯塚さんや職員の話聞き、中学生は熱心にメモを取っていた

## 成長するマレーシアの課題

1957年の独立以来、順調な経済成長を遂げ、2020年までに先進国入りを目指すマレーシア。発展に伴い、近年、自然破壊や廃棄物の増加など環境問題が深刻化している。研修旅行に参加した中

高生たちは、そうした同国の現状と環境問題に対する日本の協力について理解を深めるため、青年海外協力隊員の環境教育活動を視察した。中学生が出会ったのは、07年1月からサラワク州・ミリ市役所の公衆サービス・保全部に派遣されている飯塚正利さん。同市では、人口の急増に伴うごみの増加が大きな問題となっている。飯塚さんは、固形廃棄物の減量化やリサイクル率の向上を目指して、市と協力しながらリサイクル品の回収キャンペーンや、市内の学校やNGOで環境教育を行っている。子どもたちは、飯塚さんに連れられ市内からバスで約1時間のところにある市役所直轄の埋め立て地を訪れた。敷

地の中に入ると、フーンと鼻を突くにおいとともに、ごみの山が視界いっぱい広がっている。紙くずや残飯、空き缶などさまざまなごみが混ざり、そこにはプラスチックや金属といったリサイクル品の分別・回収を仕事とする、周辺国からの外国人労働者の姿もあった。「年々増え続けるミリ市のごみのうち、40%が残飯です」と飯塚さん。この埋め立て地はもうすぐ限界容量を超え、新たな埋め立て地が必要だという。そのため、市はショッピングセンターやホテル、学校などに分別用のごみ箱を設置して市民に資源のリサイクルを呼び掛けているほか、ダンボール箱を使って生ごみを堆肥に変えるダンボールコン



ミリ市役所で環境問題に対する取り組みについて聞き、英語で質問する藤野朋子さん(右)

ポストを紹介。「でも、リサイクルの意識はなかなか定着しないんです」(飯塚さん)。その実態を自分たちの目で確かめようと、子どもたちは町のごみ箱を調べて回った。燃えるごみ、燃えないごみ、資源ごみと3色に分けられ分別しやすい工夫がなされているにもかかわらず、分別されていない。また、当たり前のようにポイ捨てする人を見掛けるなど、人々の環境に対する意識の低さに驚いた。

だが、飯塚さんや市の職員から、意識改革のためにさまざまな努力をしていることを聞き、「問題の難しさと日本の国際協力の大切さが分かった」という。中でも、羽住恵理さ

んは「残飯が多い、埋め立て地が足りないなど、マレーシアと日本のごみ問題は似ている。個人のためではなく公的な利益のために、人々の意識の転換が必要」、川崎康太さんは「自分も食べ残しをやめるようにしたい」と話していた。

## 同世代の熱心な取り組み

次に向かった先は、マレー系、中国系、インド系、サラワク州の先住民系の民族1100人の生徒が通うリナム中学校だ。同校では、部員数60人を誇る「環境クラブ」が中心となって、空き缶を利用したペン立てや造花の制作、壊れた机・いすの修理といった廃棄物の再利用を行っている。学校周辺の住民を巻き込んだリサイクルキャンペーンや、校内で環境への意識を高めるイベントも実施するなど、環境問題に積極的に取り組んでいる。

歓迎のダンスで迎えられた後、環境クラブのメンバーがパソコンを使って、クラブの活動を紹介。日本の中学生5人も、それぞれが暮らす地域や学校で行われているリサイクルや美化活動について発表した。

先進国の過剰な消費生活に対して問題提起したエッセイ「地球への小さな恩返し」で文部科学大臣奨励賞を受賞した金床菜々子さんは、「もったいない」の精神を説明して、「もったいないの意識を世界に、特に物質的に豊かな国に広め、地球上の限られた資源を大切にしようと呼び掛けたい」と話し、発表の最後にマレーシアの子どもたちと一緒に「MOTTAI NAII!」と繰り返した。環境クラブの部員は「私たちも、もったいない」を提唱していきたい」と応じていた。

## 研修旅行から得たもの

10日間にわたる研修旅行の最終日、中学生たちはさまざまな感想を語ってくれた。「自分が知らない価値観・社会があることが分かった。日本やほかのアジアの国のことをもっと勉強したい」「日本に帰国したら学校や地域で環境活動をやりたい」と、新たな目標を見つけた子もいれば、「ありがたうの心を伝えたい」とマレーシアや研修旅行でお世話になった人々に対する感謝の気持ちを強調する子もいた。エッセイコンテストをきっかけに地球の問題に目を向け、

マレーシアで環境問題と闘う人々に出会い大きな刺激を受けた彼らが、これからも地球や世界の人々のことを思いながら、自分たちの地域でできることを実践していつてくれることを期待したい。

## 「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2008」作品募集中!

JICAは、今年度も開発途上国の現状や日本の国際協力に対する理解を深めてもらうことを目的に、全国の中学・高校生を対象にエッセイを募集しています。

募集期間：2008年6月12日(木)～9月10日(水)

テーマ：地球と生きる～地球に暮らす一員としてできること、考えること

応募規定：規定の応募用紙に必要事項を明記の上、原稿(中学生の部は400字詰め原稿用紙3枚以内、高校生の部は400字詰め原稿用紙4枚以内)と合わせて郵送。詳細および原稿用紙・応募用紙のダウンロードは、JICA地球ひろばのホームページから(<http://www.jica.go.jp/hiroba/join/sanka/essay/index.html>)

応募先：(社)青年海外協力協会内

「JICA国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2008」係

〒150-0012 東京都渋谷区広尾4-2-24

TEL：03-3406-9151 FAX：03-3406-9160

問い合わせ：最寄りのJICA国内機関(<http://www.jica.go.jp/worldmap/partner.html>)